

道内出土の亀ヶ岡式土器

成分に津軽の火山灰

弘大分析 北への搬出証明

北海道道央、道東で発掘された複数の亀ヶ岡式土器に使われた土の中に、県内の火山から噴出し、津軽一円に降り積もった火山灰の成分が含まれていたことが、弘前大学の研究グループによる調査で分かった。津軽地方で作られた縄文土器が、津軽海峡を越えて北海道内各地へ運ばれていた

北海道道央、道東で発掘された複数の亀ヶ岡式土器に使われた土の中に、県内の火山から噴出し、津軽一円に降り積もった火山灰の成分が含まれていたことが、弘前大学の研究グループによる調査で分かった。津軽地方で作られた縄文土器が、津軽海峡を越えて北海道内各地へ運ばれていた

元教授らのグループが27日、東京・明治大学で開かれた日本考古学協会総会で発表した。

関係教授らのグループは、北海道央・苫小牧市の柏原遺跡、静川遺跡と、道東・釧路市の幣舞遺跡から出土した亀ヶ岡系の土器の形状をした土器計20点を、中に含まれている、火山灰



釧路市の幣舞遺跡から出土した大型の壺。津軽一円に分布する尾開山凝灰岩の火山ガラスが検出された(関根教授提供)



中に含まれている、火山灰と、また同一火山でも噴火するたびに組成が異なる「火山ガラス」と呼ばれる火山灰成分を調べ、データベースと照合し土の採取地域を特定させる方法で調査

このころ、柏原遺跡の注口土器と浅鉢、幣舞遺跡の大型壺など、火山ガラスが津軽一円に分布する「湯ノ沢カルデラ」(平川市砦ヶ岡)が約350万年

前に大噴火を起こした際の噴出物、尾開山凝灰岩と同一組成だった。これは今も平川市の白岩森林公園に露出しているのが見られる。また、柏原遺跡の浅鉢には、八甲田のカルデラ由来

の火山ガラスも含まれていた。これにより、土器は本県内で採取された土で作られた後、道内に搬出されたことが証明された。

一方、形状から道内で作られたとみられる「在地系」の土器も同時に調査したところ、いずれも十勝地方など道内を噴出源とする火山灰の火山ガラスが含まれ、本県由来の成分は見られなかった。このほか、亀ヶ岡系の2点からも道内由来の火山ガラスが見つかり、現地で作られた模倣品と判明した。

関根教授の研究グループは昨年、沖縄県北谷町で発見された亀ヶ岡系の土器の破片の乗塵を同様の方法で調査。九州福島の海底にあり、約7300年前に西日本一円に火山灰を降らせるほどの大噴火を起こした火山由来の土が検出されたことなどから、西日本で作られた模倣品と特定。北東北の「情報」が人によって西日本まで伝えられ、土器という「物」となって沖縄まで移動したことを解明し話題となった。

27日、発表を行った柴元教授は「本県で作られた優れた土器やその作り方が、遠く北海道や沖縄まで伝播したことが明らかになり大変感動を覚える」と話した。(外崎英明)

※この画像は当該ページに限って東奥日報社が利用を許諾したものです。東奥日報社に無断で転載することを禁止します。

[問合せ先]弘前大学理工学研究科 E-mail:r\_koho@hirosaki-u.ac.jp